
自ら学習課題をつかみ議論する問題解決的な道徳授業

～道徳性の発達段階を教師が見取る授業実践から～

吹田市立北山田小学校 教諭 川添龍次

【課題】

1. 問題意識

よりよい生活や人間関係を築くためには、自分や他者の考えを共有し、協働の目的のもとに整理して、互いに理解し合うことが重要である。それは、ただ知識を習得するような勉強や受験のための学習、受け身な態度では得ることができないものであるといえる。また、特別の教科として道徳科が設置され、よりよく生きるための道徳性を養う必要性が強く示されている。子ども達の心の成長を促すためには、道徳の学び方を捉えなおす必要があるのではないかと考えている。

2. 実践研究の目的

本研究は、子ども達が主体的に考えを出し合おうとする道徳授業の開発と効果の検証を目的としている。アクティブ・ラーニングを意識した授業展開を考案することで、これからの社会を生き抜くために子ども達に求められている、お互いの考えを伝え合い自分の考えや集団の考えを発展させる力を身につけさせたい。また、主体的に考えさせることで学習の方向性を見失う怖さを感じ、道徳の授業に対する苦手意識や難しさを感じているといった教員の声も少なくない。子ども達が主体的に学べる授業を誰もが実践できるためには、指標となるものが必要である。道徳性の発達段階を考慮することで、教員が自信をもって適切な指導を行えるような指標を開発したいと考えている。

3. 仮説

道徳性の発達段階を教師が意識し、見取りながら授業を進行することで、子ども達が主体的に考える道徳授業がより円滑にできるのではないかと考えている。

【実践報告】

1. 問題解決的な道徳の授業開発

(1) アクティブ・ラーニングを意識した授業展開

本研究のように主体的に学ぶことの重要性を、道徳の分野で提唱している研究者も少なくない。柳沼(2015)は従来の道徳授業の課題を踏まえた上で、道徳科の指導方法として問題解決的な学

習を進めることが特に必要であるとした。問題解決的な学習は、子どもが互いに意見を尊重し、協働してよりよい生き方を探求するために有効であると考えた。また、ねらいの達成に向けた言語活動や表現活動を充実させて、子どもが自ら考え、主体的に判断し、表現することの重要性を示し、道徳でも他教科に先駆けてアクティブ・ラーニングを導入する必要があるとした。

本研究の道徳授業は、資料と出会った後「今日の授業で考えるべきことは何か」と問いかけられた子ども達が、「なぜ？ どうして？ 本当に？」と思ったことを中心に話し合いながら、深めるテーマを自分たちで設定していく。子ども達は言語活動を通して、様々な意見や思いを交流しながら、自らの考えを深めていくことになる。教員は子ども達の思考の軌跡を黒板に記録し、整理しながら授業を進行するファシリテーターのような役割を担う。この授業は、教員が課題を子ども達に与え、決まった内容について話し合うような展開ではなく、自分たちが疑問に思ったことについて議論していくものであり、子ども達が主体的に課題を設定して問題解決に取り組む授業であるといえる。

(2) 本研究の道徳授業の特徴

主体的に学習させようとする道徳授業の実践は、今までも数多く行われてきた。子どもが自ら道徳性を養うために、教員は様々な形で工夫してきた。すばらしい実践がたくさん残されていることも事実である。しかし、その多くは子ども達の道徳性がどの程度育ったのかをはっきりと示したものではない。活動が中心となってしまう、ただ活動的な場面を仕掛けるだけの授業になっていることもある。教員が授業の中で道徳性の育ちをより意識できるものがなければ、決まった道徳的価値について知識を与えただけで、道徳性そのものが向上したとは考え難い。そこで本研究では、道徳性の育ちを客観的に評価するための指標として、道徳性レベル表を開発した。

道徳性の発達については、清水(1989)の道徳性発達の4レベルを参考に、コールバーグの道徳性

発達理論から考えた。各学年の子ども達の様子や授業中の発言を記録し、小学生の認知能力や経験値を配慮しながら、道徳性レベル表を5段階で作成した。まず、入学当初の子どもは自己中心的で主観的な発達段階であると考えられる。もちろん小学校の低学年の子どもにも多いが、高学年であってもそういった言動の子どももいる。その後、相手意識を持ち、人の目を気にするようになって考えられる。高学年になると相手の立場になって考え、譲り合う気持ちを持った子どもが出てくる。中には社会の中の自分、決まりや秩序を大切にしたい意見が出されることもある。小学校6年間でこのような発達を見せる子どもに合うような客観的に道徳性を評価できる表を作成しようと考え、本研究の道徳性レベル表は構築されている。

本研究の授業では、この道徳性レベル表を授業中に活用する。まず、課題設定場面で活用する。そこまでの授業の中でレベル2の意見が多いようであれば、学級で取り組む課題はレベル3について考えさせたい。もしレベル1であればレベル2、レベル3であればレベル4といったように、1つ上のレベルの内容について考えを深めていくことで道徳的価値に気づき、道徳性が養われると考えられるためである。次に、問題解決場面で活用する。個人でワークシートに記入させたり、グループで話し合わせたりする中

で、必ずどこかでレベル1の意見が出され、順々にレベルの高い話し合いへと移行する。レベル1の意見を取り上げ、1つずつステップアップするように話し合いが進むよう教員が支援することが大切である。少しずつ高いレベルでの話し合いになり、それ以上の意見が出ない飽和状態になったときに、授業の山場となる。そこから1つ高いレベルの意見を出させられるよう、机間指導を十分に行っておくことが重要である。最後に、授業の振り返りで活用する。子ども達に授業で学んだことを記述させ、課題設定の時点と振り返りの時点の道徳性レベルを確認する。議論を通して考えが深まっている記述をより客観的に見つけることができる。

このように授業中に子ども達の道徳性を評価しながら授業を進めることで、分かりきった必要のない議論ではなく、子ども達に本当に必要なレベルでの道徳性について考えさせることができるのである。以下に具体的な使用例として『ブランコ乗りとピエロ』で使用した道徳性レベル表を示す。(表1)

2. 問題解決的な道徳授業の実践

(1) 実施方法

本研究で開発した授業展開を道徳の時間に実践して検証する。実施した教材は「私たちの道徳(小学校五・六年)」に載っている『最後のおくり物』『ブランコ乗りとピエロ』『小川笙船』など、基本的に

表1 道徳性レベル表 ～『ブランコ乗りとピエロ』評価の観点と予測される子どもの発言例～

レベル	発達段階	道徳的な観点と能力	本時の教材から気づくこと
1	自己中心的 主観的	自分にとって好き嫌いが判断基準。視点の違いに納得できず、1つの見方に捉われる。	・ピエロはサムに腹が立っている。 ・サムもピエロに腹が立っている。 ・自分もスターとして活躍したい。
2	相手意識 give&take	人に言われて行動する。人の目を気にする。自分がしてあげたら、同じだけしてもらおう。	・ピエロが言った言葉で、自分だけがスターだという気持ちだけではダメだと思う。 ・アレキス様に認めてもらうためにどうするか。
3	対人関係の調和 メタ認知的な考え	それぞれの児童がお互いに主体として考えることができる。相手の意図を理解して、抽象、妥協することができる。	・ピエロはがんばっているサムのことを見直した。 ・一晩話しかけたサムとピエロはお互いを深く理解した。 ・相手の良いところを認め合うことができた。
4	法と秩序を 重んじる	世の中で「正しい」とされていることを理解して行動する。社会の一員としての広い視野と意識。	・1人だけ目立ってはいけない。(秩序のため) ・みんなががんばっている。サムとピエロの2枚看板であるよりも、全員が主役という意識が必要。
5	自立と自律	周りの環境や相手の心情を考えながらも、自分の信念に基づいて、より良い方法を追究する。	・このサーカス団をより良いものにするためには、サムとピエロのようなスターが他にも生まれるように、考えていくことが大切。

は読み物教材である。

(2) 対象・実施日時

小学校6年生72名、2クラス編成。2015年9月から12月に各学級で行った実践に基づいて報告する。自作教材や絵本、昔話などの読み物教材を使用し、週に1時間程度、様々な内容項目に取り組み、本研究で開発した授業と評価を行っている。校長ならびに各学級担任、研究推進の委員会の了解を得ている。

今回は2015年12月11日(金)に行った『ブランコ乗りとピエロ』の実践内容を具体的に報告する。

(3) 実践内容

授業の導入では、物語との出会いをより円滑にすることが求められる。子ども達が物語を理解できないと、その授業は国語的な読解の授業となり、内容の理解に終始することとなる。『ブランコ乗りとピエロ』は一読で内容を完全に把握するには難しい場面もあり、読みながら子ども達の理解を助けるような助言、支援が必要であった。

物語と出会った後、取り上げたい登場人物について学級で共通の認識を持たせておく。サムとピエロがお互いにどのような思いを持っているのか発表し、黒板に整理しながら全体で共有した。主人公の人物像や道徳的な葛藤場面を整理しておくことで、道徳的価値に焦点化した話し合いを展開することができる。

物語について理解が進むと、子ども達から疑問が生まれた。「なんでピエロはサムを許せたんやろ?」「サムはピエロの話聞いてどう思ったんやろ。」「自分がピエロだったらどう言うかな。」といった意見を教師が分類しながら、今一番深めるべき内容はどれか考えさせてテーマを決定させた。このとき、道徳性レベル表のレベル2の発言が多く、ピエロとサムの損得を考えてしまう意見が目立った。子ども達は「ピエロはなぜサムのがんばりを認めることができたのか。」ということについて話し合いを進めることに決めた。

課題を設定したらグループでの話し合いを行う。解決するために様々な視点で考えを出し合い、自分の言葉で伝え合う時間となる。物語の記述や自分の経験から意見を出し合い、グループで考えを深めていた。グループでの話し合いが十分にできたら、話し合った内容、意見、新しい発想などを学級全体に発信し、交流する。「真っ青になるまで盛り上げようとしていた。」「ただの自己中心的な人ではなく、サーカ

スのためにがんばっていたのではないか。」「目立ちたいだけと書いていたら、自分のためだけではないような気がした。」「ピエロはサムもこのサーカスに力を入れて努力していることがわかった。」「交流すると発表された意見に対してさらに議論が起こり、子ども達1人ひとりの考えが深まっていく様子がかがえた。最後には「サムはみんなに認められたことで、気持ちが変わったのだと思う。」と、サムの目線に立った意見も出ていた。

子ども達の意見を聞きながら、道徳性レベル表のレベル3の意見が多く出されているか、さらにはレベル4のきっかけになる発言はあるかを確認した。発言を黒板に記録し、軌道修正が必要な場面では助言しながら、授業を進めた。今回は、レベル3の意見が多く出されており、レベル4に気づけるか…といったところで、振り返りの時間となった。

最後の振り返りでは、子ども達に学んだこと、気づいたことを記述させた。自分の考えが変化したことや、経験と重ね合わせて考えたこと、新しい気づきなどが書かれていた。『ブランコ乗りとピエロ』では「もし自分だったら…」といった記述が多かった。また、ピエロとサムに対する尊敬の念を込めた内容が目立っていた。

【結論・考察】

1. 効果性検討のための測度

開発した道徳授業と評価の効果性を、質的データとアンケート調査から検討する。今回の研究では、まずワークシートの子どもの記述において、道徳性の変化が見られたかを検証する。具体的には、ワークシートの課題や振り返りの中で、道徳性レベル表(表1)に示したような記述が見られるかという観点で検討する。次に、授業を参観した教員や同じ授業展開で授業をした教員にインタビューを行い、子ども達の変容と授業について検討する。最後にアンケートから総合的に考察する。

2. 実践の検証と考察

(1) 子どもの記述

ほとんどの子どものワークシートに、子どもの思考の軌跡がはっきりと残されていた。課題設定場面と振り返りを比較すると、レベル2からレベル3へと変容があったことや、友達の意見によって自分の考えが深まったことなどが記されている。考えに変化のない子どもも数人いたが、考えていないわけではなく、考えた結果やはり自分の意見は揺るがないといった内容が書かれていた。また、何よりも問題解決的

な道徳授業は、もっと考えたい、楽しかったという感想が多い。友達と言語のやり取りをしながら、考えを深め合う活動の楽しさに気づき、主体的に取り組もうと意欲を高めている内容が目立っていた。

(2) 教員から見た子どもの変容

道徳の授業を楽しみにしている子どもの姿が見られた。授業後も道徳の授業で考えた課題について話し合いを続ける子ども達が多く見られ、給食中にも議論が繰り返されることがあった。なぜサムとピエロは認め合うことができたのか納得できない子どもに対して、もし自分がピエロなら無理だけど…などと前置きし、自分自身のことを振り返りながら思いを伝えている姿も見られた。なぜ、どうして…を意見として出すことが当たり前で、道徳の時間に友達と本音で語り合うことを楽しもうとする姿勢が身につけているため、同じ子どもだけが話すのではなく、全員が授業に参加しているといった印象を受けた。

自分たちで課題を設定している経験が、他の教科や場面でも応用されている。言語によるコミュニケーションの力がついたように感じている。

(3) 授業展開・道徳性レベル表について

道徳がおもしろくない、苦手だといった教員から、楽しい、わかりやすいといった声を多く聞くことができた。特に経験の浅い若い教員にとって道徳性レベル表はわかりやすい指標となり、子どもの発言を予測し整理するヒントとなったようである。どの道徳授業にも使える万能なものではないが、子ども達の道徳性を考える上でわかりやすい基準となり、自分の学級の状態や課題についても考えるきっかけとなるものであったといえる。

(4) 総合的考察

子どもの記述や教員から見た子どもの様子からも、道徳の授業に対する能動的な学習場面が確認できた。また、開発した道徳性レベル表を活用することで、子どもの発言を予測することができ、教員は自信を持って授業を進めることができたといえる。

9月と12月に行ったアンケート調査の中で、考えることが楽しいという気持ちの高まりが確認された。9月には「あてはまる・ややあてはまる」と答えていた児童が約50%であったのに対して、12月には約70%にまで増加している。これは、本研究が主体的に考えようとする意欲につながったと捉えることができる。(表2)

表2 アンケート「考えることが楽しい」

	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
9月	9.7% (7人)	8.3% (6人)	31.9% (23人)	26.4% (19人)	23.6% (17人)
12月	4.1% (3人)	0% (0人)	26.4% (19人)	34.7% (25人)	34.7% (25人)

よって、本研究で開発した道徳授業が、主体的・能動的な学びにつながる可能性を十分に持ち、その有用性を示したのではないかと考えられる。

【今後の課題】

子ども達が道徳を主体的に学ぶための工夫や教員の道徳に対する不安の解消に関して、一定の成果はみられた。しかし、それでも子ども達の自主性を引き出す問題解決的な授業は難しい。指標となるものがあっても、教員自身のレベルアップが重要である。

また、道徳性レベル表については、あくまでも参考となる指標でありそのままの評価に使うものではない。道徳的価値によっても子どものレベルは違うため、課題設定と振り返りの変容を客観的に読み解くためのツールとしての活用が妥当であろう。道徳性レベル表を子どもに教えてしまうと価値のおしつけとなることも忘れてはならない。

今後は、どの教員も能動的な道徳の授業ができるように実践研究を進めることが課題となる。そのためにも、各学校の教員による能動的な研鑽が求められるだろう。

【参考文献】

- 柳沼良太(2015)。「特別の教科 道徳」への期待と課題, 日本道徳教育学会 編, 道徳と教育 第333号, pp.165-171
- 小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編
- 日本道徳性心理学研究会(1992). 道徳性心理学, 北大路書房, pp.47-114
- 清水保徳(1989). 個の道徳性の発達に応じた道徳の時間の指導—コールバーグ理論を活用した授業展開—, 東京学芸大学附属世田谷小学校 編, 藤棚 第13号 初等教育を考える, pp.46-53